特集　子どもの心に響く学級経営ー望ましい学級活動を通してー

「あの子さえいなければ・・」が
「あの子がいてくれたおかげで・・」になった時

私はやっと教師になれました

教育サポーター　仲　島　正　教

先生になって四年目、私が初めて一年生を担任した時に、陽子（仮名）という女の子がいました。陽子は勉強はできるのですが、時々大声を出したり、教室から飛び出して隠れてしまったり、また友だちとの関わりが下手でもめ事もよくおこしていました。今、思えばこの子はアスペルガー症候群だったのかもしれません。

ただでさえ私は初めての一年生担任でとまどっていたのに、陽子に振り回され大変な毎日を送っていました。陽子が休んだ日には教室は平穏で私もホッとしていたのです。そんな陽子が三学期になって東京に転校することになりました。電話でその連絡を受け、

「お母さん、それは残念です」

と話しながら、私は心の中でホッとし、これでやっと平穏で普通のクラスになれるなって思ったのです。そうです、陽子の転校を喜んでいた私でした。

転校する日、学校にお母さんがあいさつに来られました。

「仲島先生、本当にお世話になりました。陽子のこと、大変だったでしょうが、先生はいつも一生懸命にしていただき、心より感謝しております。ありがとうございました」

と話された瞬間、私の目から大粒の涙がポロポロと流れ出し、

「お母さん、すみませんでした」

の一言しか言うことが出きませんでした。

私は心の底から自分を恥じました。自分はなんてひどい先生なんだ。この子がいなくなればいいと思っていた自分が情けなくなり、そして陽子と陽子のお母さんに申し訳ない気持ちでいっぱいになったのです。

「いいえ、仲島先生。先生は本当に一生懸命に陽子のためにしてくださいましたよ」

お母さんが言うとまた涙が出てしまいました。私はまた

「いえ、本当にすみませんでした」

としか言えませんでした。

私が保護者の前で見せた初めての涙でした。

☆　☆　☆　☆

ある時、私は先輩教師から学級づくりとは、「**クラスの中で一番厳しい状況の子が、生き生きと活動する学級をつくること**」

と教えられました。でもどうやってその子を生き生きさせるのかわかりませんでした。すると先輩は、次の３つのことを実践しなさいと私に言いました。

- **とにかく、一緒に遊べ！**
- **時々、家庭訪問に行け！**
- **学級通信に子どものことを書け！**

「何して遊んだらいいですか？」

「何を言いに行くのですか？」

「何を書けばいいのですか？」

そうたずねると、先輩は怒ります。

「そんなこと言う前に動け！いろいろ気にしていたら、何も始まらない。要は、**出来るか出来ないかじゃない、するかしないかだ**。まずは思い切ってやってみろ！」

私はその先輩の言葉を信じて、とにかくやってみることにしました。

次の日の休み時間、私はその子の手を引いて外に連れ出し一緒に遊びます。次の日も次の日も遊びます。他の子どもたちも一緒についてきて遊びます。すると一週間後、私が連れ出す前に、子どもたちがその子を連れ出すようになりました。今まで教室で一人でいることが多かったその子が友だちと一緒に遊んでいるのです。その子に笑顔が戻ってきました。

今度は思い切って家庭訪問に行ってみました。玄関の戸が開き、

「うちの子、何か悪いことをしましたか？」

とお母さんはけげんそうな顔です。

「いえ、違います。最近、A君は友だちと仲よく遊んでいますよ。今日も一緒にドッジボールをしましたよ。A君は元気になりましたね。」

お母さんの表情が柔らかくなりました。

たった五分の家庭訪問でしたが、私もなぜか元気が出ました。ちょっと緊張したけど行ってよかった！そう思いました。それからも私は仕事の帰りに、たった五分間の家庭訪問を繰り返すようになりました。するとその子はますます元気になっていくのです。その効果に驚くばかりでした。

学級通信については一年目から書いていましたが、構成やカットにこだわっていたため、いつも一枚書くのに時間がかかり発行枚数はわずかでした。先輩は

「そんなに構成を考えなくてもいいよ。子どものいいところを伝えるだけでいいんだ。B４用紙一枚だと書くのは大変だけど、B５用紙一枚ならすぐに書けるだろ」

私は、日々の子どものいいところを見つけて、それを書き出すだけの学級通信にしました。B５用紙なら、なぜかスラスラ書けるのです。するとB４用紙の時より、五倍の発行枚数になりました。

「今日、給食の準備の時間に、当番同士がぶつかっておかずがこぼれました。すると三班の中野君と田中さんと佐藤君はすぐに片付けてくれました。そのすばやい行動に先生は感心してしまいました」

「算数の時間に計算ドリルをしましたが、加藤君は自分が出来た後、となりの子にていねいに教えていました。これが支え合う学習の第一歩ですね。いい仲間です」

「体育でリレーをしましたが、五班の井田さんと池本君と三井さんと坂田さんと井上さんのチームは、バトンパスの時に声をかけながら練習をしていました。五班が強い理由はこの魔法の声なのです」

そんな学級通信を私が読むのを子どもたちは毎回楽しみにしてくれるようになりました。

あの子を生かすためにやった三つのことは、実はクラス全体にも広がっていったのです。そして学級がまとまり始めました。

先輩の言ったことは本当だったのです

☆　☆　☆　☆

陽子の家の引っ越しは、お母さんがあいさつに来られた翌日でした。荷物は車で送り、陽子の家族は新幹線で東京に向かいます。

「最後にもう一度学校を見たいので、新大阪ではなく新神戸から新幹線に乗りますね」

と聞いていました。そうなのです、私たちの学校のそばを新幹線が通っていたのです。私は子どもたちに

「運動場に出て、みんなで陽子にさようならをしようよ」

と言うと、

「先生、何時の新幹線？」

と聞くので

「わからないんだよ、でもお昼までの新幹線に乗るって言ってたよ」

「じゃ、給食までずっと手を振ろうよ」

一年二組38人は、朝の８時30分から12時30分まで四時間運動場に出ずっぱりで、新幹線が通るたびに思いっきり手を振りました。

後日、お母さんから手紙が届きました。

「先生、それから一年二組のお友達。本当にありがとうございました。新幹線から見た最後の学校を、陽子は一生忘れないと思います。みなさんが大きく手を振っている姿を陽子は目を大きく開けてじっと見つめていました。あの子は幸せな子です」

「あの子さえいなければ・・・・」という気持ちが「あの子がいてくれたおかげで・・・」という気持ちに変わった瞬間でした。

私はやっと教師になれました。